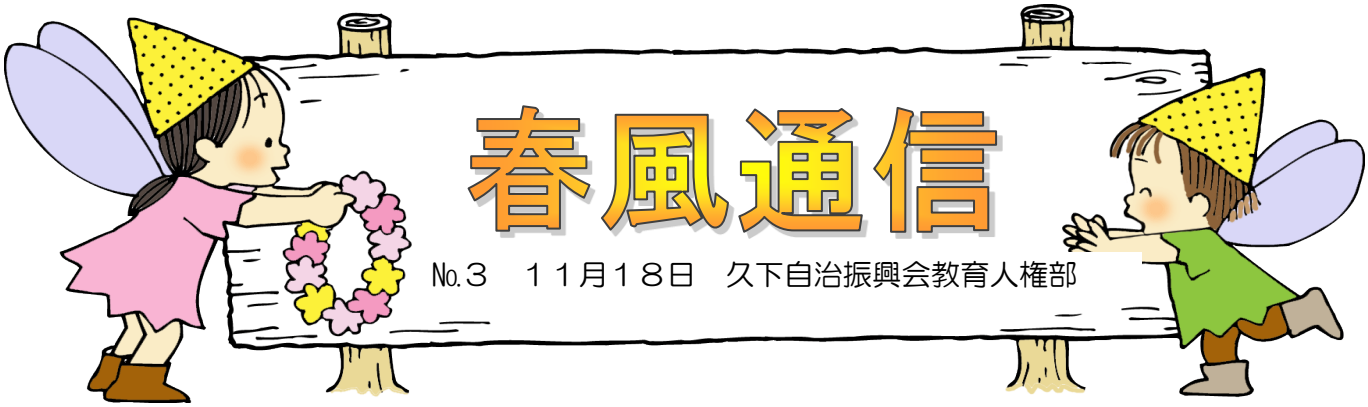

春風通信

№３　１１月１８日　久下自治振興会教育人権部

誰もが大切にされる社会をめざして

人権学習の初めに、「差別」と「区別」について考えました。「区別」とは、「それぞれが本来持っている個性や特性のちがいで分けること」「日本人と外国人」や「男子と女子」などの表し方がそれにあたります。そして、「差別」とは、「性別、人種、病気、住んでいる場所など、本来持っているものに差を作って、不当な扱いをすること」と、おさえました。

差別は人がつくり、人が残してきたものであり、それをなくそうと戦ってきたのも人であり、それをなくしていけるのも人でしかなく、なくしていける人として生きていくための学習を積み重ねていきたいと思っています。

差別意識は、ケガレ意識にはじまり、武士の世の中以前から人々の中にあり、その人々の差別意識を利用して武士の世の中において制度化し、百姓や町人たちを支配したことを学習しました。

銀閣の庭を造った庭師「又四郎」、日本の医学の発展につくした虎松の祖父、武器を持たずに 1500 人の力を集めてあきらめずに話し合いを続けて勝利した渋染め一揆に参加した人々、身分の開放を粘り強く訴え解放令が出され、その解放令に反対する一揆に立ち向かった人たち、そして、すべての人間の開放をめざして、設立された水平社に携わった人々など、厳しい差別の中生き抜いてきた人たちの生き方を学習する中で、自分だったらどうだろうか？と、考えました。また、この丹波市にも、京都の水平社創立大会に参加した人がいたこと、さらに、この丹波市においても差別をなくすために水平社を立ち上げ、そこで一番大切にしたことが、「子どもに勉強をさせること」「何が正しく、何が間違っているかを、正しく知るための教育が大事であること」であったことを学びました。

１１月５日には、細田哲子先生に来ていただき、水平社設立に込められた多くの人たちの思いについて語っていただきました。「まずは、あるがままの自分を認めよう。そして、自分と同じように、自分のとなりの人も、今を精一杯生きている大切な存在であることに気づける人になろう」と、熱いことばで子どもたちに伝えていただきました。

そして、11 月 26 日（木）には、学習のまとめとして、奈良県にある水平社博物館を見学し、その地をフィールドワークすることで、差別をなくすために立ち上がった人々の思いを肌で感じて来たいと思っています。

感想

今日、差別は絶対いけないとあらためて思いました。でも、クラスの中を見ても絶対にないとは言い切れません。気づいていなかったり、気づいていても注意しなかったり、あるいはかげでやっていたりもあります。そこがダメなところです。自分たちで、これから差別を続けていくのか、差別のないクラスを作っていくのか、決めて進まなければなりません。自分がしなければだれもしてくれません。自分たちで差別をなくしていきたいです。

差別をなくしていくには、正しく知ることが大切です。差別をするということは、自分を大切にしないでバカにしているのと同じだと思います。周りの人が差別をしているのを、見て見ぬふりをしているのは、差別をしているのと同じです。注意したりするなどの行動をしないといけないと思います。